

2019年12月8日

福音書からのメッセージ

悔い改めにふさわしい実を結べ。

(マタイによる福音書3章8節)

今日の聖書には、洗礼者ヨハネが人々に悔い改めを宣べ伝えるという出来事が描かれています。天の国は近づいた、つまり神さまの支配が近づいたのです。間もなく神さまがこの地を支配する。そのときに、神さまにそっぽを向き、背き、裏切ってきたあなたたちはどうなってしまうかとヨハネは叫びます。

しかし「悔い改めよ」という言葉を聞くときに、それができない自分にも気づかされます。罪の自覚はあります。正しい者でないのも分かっています。しかし「悔い改めよ」という声に従って歩いていく、その勇気がないのです。

少しぐらいのよごれであれば、洗い流してもらえるかもしれない。少しだけ神さまに背いていたのであれば、方向転換もすぐできるかもしれない。でもそんなレベルではない自分の姿を自覚したときに、わたしたちはその声に向かっていけるのでしょうか。

この前、幼稚園で羊飼いの話をしました。イエス様が誕生されたとき、その喜びの知らせは、野原で羊の番をしていた羊飼いの元に一番に届けられました。主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らし、「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった」という喜びの知らせを羊飼いたちは聞きました。

では羊飼ってどういう人たちだったのでしょうか。そんなにすばらしいお告げを真っ先に聞けるのですから、神さまのいつけをしっかりと守る正しい人達だったのでしょうか。決してそうではありませんでした。

彼ら羊飼いは非常に貧しく、定住地を持



ちませんでした。そのため安息日を守ることもできず、動物の死骸や血を日常的に扱っていたために、社会ののけ者とされてきました。神さまから遠く離れ、見捨てられた存在だと彼らは思っていたことでしょう。悔い改めよという言葉が耳に入ったとしても、どうすることもできないのです。自分の力で神さまの元に近づくことなど、まったく無理でした。

しかしそんな羊飼いの元にも、救いの喜びがもたらされます。それこそがクリスマスの奇跡なのです。たとえ心の中がぐちゃぐちゃでもいい。もちろんきれいに整頓されていてもいいでしょう。しかし心が混沌としていても、真っ暗闇でも、声も出ない状態でも、一歩も進めなくても、でも、それでも、イエス様は必ず来て下さる。わたしたちの心に光をもたらすために、来て下さるのです。

わたしたちは自分の力だけで、神さまの方に向き直ることができるのでしょうか。心から悔い改めることができるのでしょうか。それができないことを知っているから、神さまはわたしたちに大切な独り子を与えてくださいました。その日を待ち望んでまいりましょう。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

Tel/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nsskk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannnari.com/>